

「概念的命題、反経験的命題の確率的確証」文科省科研費 基盤研究 B(1) 課題番号 15320006 『「偶然性と確実性に関する哲学的・理論的研究」(代表:服部裕幸)研究成果報告書』(2006年3月) pp.61-78

## 概念的命題、反経験的命題の確率的確証

三浦俊彦

### 第1節 「私」はどれほど生まれそうだったのか

本稿では、次のような論証 A が支持できるかどうか、できるとしたらどのような補助前提が必要か、そしていかなる諸帰結を伴うかを論ずる。(論証 A は、三浦,2003b の第7章で粗描した議論を敷衍したものである)。

.....  
論証 A

この私を生んだ特定の時空点で特定の物質が意識を生み出すことが、「私」が存在するための必要十分条件である。..... Q

この私のような内容を持つ意識をいずれかの時空と物質が生み出すことが、「私」が存在するための必要十分条件である。..... T

いかなる内容を持つ意識であれ、いずれかの時空と物質が意識を生み出すことが、「私」が存在するための必要十分条件である。..... R<sup>\*1</sup>

一通りの境界条件と一通りの法則が実現された唯一の宇宙だけが存在する。..... S

さまざまな境界条件と法則の可能性の各々が実現された諸宇宙が存在する。..... M

自己の形而上学理論 Q、T、R の事前確率を、宇宙の形而上学 S、M と、私が今現にここにいるという証拠 E とに条件付けた事後確率と比較してみよう。わかりやすいように、S、M のそれぞれに大別した形で論じる。

#### S の場合

$$P(T|E) / P(Q|E) = P(E|T) / P(E|Q) \times P(T) / P(Q)$$

---

\*1 Q と T の両方の条件を必要とする選択肢(時空・物質的同一性と性質的同一性がともに「私」の存在にとって本質的とする案)や、各選択肢について必要十分条件ではなく単に必要条件とするバージョン、前件と後件を確率的に結びつけるバージョンなど、さまざまな修正が考えられるが、ここでは簡略のため、Q、T、R 三つの選択肢だけを考える。R のさまざまなバージョンについては第3節で考察する。なお、Q、T、R のような、経験的差異をもたらさず概念的にのみ区別できる仮説について、それぞれ「事実としてどう個別化するか」「有意味に区別可能な仮説かどうか」を疑問視し、ベイズ的仮説検定にはふさわしくないと仄めかした柏端,2005 に対する回答が本稿である。

$P(E|T) = 0$      $P(E|Q) = 0$   
 $P(T|E) / P(Q|E)$  と  $P(T) / P(Q)$  の大小は不明

$P(R|E) / P(Q|E) = P(E|R) / P(E|Q) \times P(R) / P(Q)$   
 $P(E|R) = 1$      $P(E|Q) = 0$   
 $P(R|E) / P(Q|E) = P(R) / P(Q)$   
 同様に、  $P(R|E) / P(T|E) = P(R) / P(T)$

Mの場合

$P(T|E) / P(Q|E) = P(E|T) / P(E|Q) \times P(T) / P(Q)$   
 $P(E|T) = 1$      $P(E|Q) = 0$   
 $P(T|E) / P(Q|E) = P(T) / P(Q)$   
 同様に、  $P(R|E) / P(Q|E) = P(R) / P(Q)$

$P(R|E) / P(T|E) = P(E|R) / P(E|T) \times P(R) / P(T)$   
 $P(E|R) = 1$      $P(E|T) = 1$   
 $P(R|E) / P(T|E)$  と  $P(R) / P(T)$  の大小は不明

Q、T、Rの事前確率をさしあたり等しく見積もるならば、  
 Sの場合、事後確率は    Q、T、R  
 Mの場合、事後確率は    Q、T、R

SだろうがMだろうが（宇宙が一つだろうが多数だろうが）、Qは偽、Rは真である確率が高い。

S、Mの事前確率をさしあたり等しく見積もるならば、信頼度は  $Q = T = R$   
 こうして、この私の誕生は、任意の意識主体（知的生命）の誕生と同値である。

以上、論証Aおわり

.....  
 論証Aは、いくつかの経験的主張を隠れた前提として含んでいる。たとえば次の部分。

Sの場合

$P(E|Q) = 0$      $P(E|T) = 0$      $P(E|R) = 1$

Mの場合

$P(E|Q) = 0$      $P(E|T) = 1$      $P(E|R) = 1$

この6つに順に ~ と番号をふってそれぞれの物理学的根拠を述べ直すと、こうなるだろう。

特定の時空点と特定の物質で何らかの意識が実現する確率は、極小。

時空点、物質を特定せずとも、ただ一つの宇宙の中に特定の内容の意識が実現する確率は、極小。

宇宙がただ一つであれ多数であれ、何らかの意識が発生する確率は、ほぼ1。

時空点、物質を特定しなければ、諸宇宙のどこかに特定の内容の意識が実現する確率は、ほぼ1。

が真であるためには、時空点の特定と物質の特定が意識実現のメカニズムとは独立であること、あるいは宇宙は非決定論的であること、そのどちらかが必要である。 が真であるためには、やはり宇宙が非決定論的であることが必要だろう。 は、意識の実現確率の低さと、(諸)宇宙の広大さ(試行の多さ)との比較において、後者がまさっていることが想定されている。 は、 での困難を凌駕するほど多くの諸宇宙が実在することを多宇宙説は認めるだろうということに依存している。

これらについては、本稿では争わないことにしたい。なぜなら、 ~ すべてが真偽未定だとしても、有限の事前確率が割り振られるかぎり、次のことは依然として成り立つはずだからである。(P" は ~ の可能なあらゆる場合に条件付けて計算した事後確率)

$$P''(E|Q) \quad P''(E|T) \quad P''(E|R)$$

P''(E|R)は、通常のいかなる想定のもとでもP''(E|Q)、P''(E|T)を下回ることはなく、とくに、S、Mおよび関連する諸仮説( ~ )ほかの事前確率をさしあたり等しく見積もるならば、最終的な事後確率は Q T R となることに変わらない。

こうして、観測事実E(私が今現にここに存在しているという事実)が与えられた以上、Rを支持する強力な理由を私たちは持っていることになる。

## 第2節 比較不能な諸命題の事前確率

私がただ生きているというだけで、「私は特定のこの人間だったとは限らず、どんな知的生命体でもありえた」「地球など無くても私はいずれどこかに生まれていた」という一見非常識な輪廻転生の命題が確証されるというのは、いかにも不思議な感じがするかもしれない。そもそもE「私は今ここにいる」は観測事実とはいいいながら、特定の視点からの一人称命題であり、世界の客観的あり方について実質的なことを述べた命題ではなさそうだからだ。Eとはいかなる種類の命題なのかを考えることで、命題Rが圧倒的に支持されると言う場合の根拠をさらに追究することが必要である。

現実のこの宇宙で私を生み出した時空点をt、物質をmとし、私の起源をt<sub>m</sub>と表記しよう。私そっくりの意識を持つ(いずれそのような意識を持つようになる)という性質はCと表記する。つまり現実にはC t<sub>m</sub> だった。ここで、現実のこの諸宇宙の履歴とは異なる別の可能な諸宇宙を考えよう(SはMの特殊例なので、さしあたりMの語法に従って、任意の数の宇宙が実現しているものとする)。つまり、別の可能世界を考えよう。その世界では、~ C t<sub>m</sub> だとする。さて、 ~ C t<sub>m</sub> から、 ~ (私は存在する)と言えるのだろうか。

t<sub>m</sub> v nなる適当なvとnについてC v nだとするならば、私そっくりの展望は開けている。そのとき、あくまで~ (私は存在する)と主張しうるならばQの事前確率はT, Rの事前確率よりも高いことになる。反対に、主観的には識別不能な展望が開けている以上、同じ「私」が存在すると言うべきだとするならば、T, Rの事前確率はQの事前確率よりも高いことになる。

私の現実の起源t<sub>m</sub>について、全く別の性質の意識Dが当てはまったような可能世界を考えてもよい。その世界ではD t<sub>m</sub> であり、つまりは~ C t<sub>m</sub> であるゆえに ~ (私は存在する)と言えるか、という同じ問題が成立する。

そこでは、同じ物質起源によるこの今の時空点(視点)から、全く別の意識的展望が開けている。そのとき、あくまで~ (私は存在する)と主張しうるならばTの事前確率はQ, Rの事前確率よりも高いことになる。反対に、主観的には全く異なる体験が今この瞬間か

ら始まっても視点が同じである以上同じ「私」が存在すると言うべきだとするならば、そして同様に、今この瞬間からではなく誕生時から意識内容が異質であったとしてもそれは同じ「この私」の意識体験が異なっているにすぎず私は存在しているのだ、と認めるべきであるならば、Q、Rの事前確率はTの事前確率よりも高いことになる。

このような選択にさいしては、「選択の手掛かりがない」という反応が健全かもしれない。世界の客観的あり方が現実とは全く異なっていたら、多くの意識がそこにあるとしても「この私」はそこにおらず、主観的には無または闇が続いていただけなのだろうか。判定の手掛かりなどありえない。しかし、「選択の手掛かりがない」場合にどうなるのかを選択できるところがベイズ的推論の強みであることを思い出さねばならない。ここで起きていることは、こういうことである。

Q、T、Rの事前確率については、どれが一番高いか、評価できない。

この場合、ベイズ的には、事前確率は「等しい」と見なさざるをえないことになる。<sup>\*2</sup> そうすると、決定的議論がない現状では（さらに言えば、「私」という概念の適用法が曖昧である現状では）、論証Aにおいて $P(R)/P(T)$ 、 $P(R)/P(Q)$ にはともに1を割り当てざるをえない。そうすると、論証AでSとMにふたたび等しい事前確率を付与するならば、総じて次のことが結論される。

$$P(R|E) = P(T|E) = P(Q|E)^{*3}$$

こうして、「私」の指示対象や、「私は存在する」の命題としての正確な意味に疑問の余地があって、複数の候補のうちどれとして決定したらよいのかが理論ネットワークの中で確信をもって定められないというのが現状であるならば、Rが最も正しそうであり、Qは最も見込みが乏しい、ということはさしあたり断定してよいのである。

以上の立論の骨子はこうだ。Eを一つの「謎」と見なしたとき（私はなぜ存在しないのではなく、存在しているのだろうか？）、Eを謎でなくする仮説があれば、謎のままに放置する仮説よりも、（他の条件が等しければ）有利だということ。Eを謎のまま放置する仮説がQ、場合によって謎のままとしたり（Sの場合）脱謎化したりする（Mの場合）のがT、そしていかなる場合にも脱謎化してくれるのがRであることを見た。謎のまま放置するというのは「実現が低確率である特殊な事実」と見なし続けることであり、脱謎化する

<sup>\*2</sup>のみならず、主観確率の考えでは、「Q、T、Rはどれかが断然もっともらしく、等しくない事前確率を持つ」ということだけが論理的にわかっていたとしても 哲学者がみな考えているとおり哲学的議論で一つだけに候補が絞られるはずだと信じられているとしても どれが一番なのか指定できない場合には、等しい事前確率を付与しなければならない。三浦;2004,p.130「ラプラスの悪魔」参照。

<sup>\*3</sup> 疑問を抱く人がいるかもしれない。Eは、「私はここに存在している」という事実だった。ところが、Eの内容は、Q、T、Rそれぞれのもとで異なる意味を持っていたのではないか。ということは、 $P(E|Q)$ 、 $P(E|T)$ 、 $P(E|R)$ は、Q、T、Rそれぞれに条件付けられた 同じデータ の条件付き確率を表わしていないのではないか。すると論証Aの計算そのものが無効になるのではないか。

しかしこれは、議論を後退させた疑問である。現実起きたEの内容は、つまり現実の私の起源と意識内容は、三つのどの場合においても同一である。Q、T、RのそれぞれにおいてEの解釈（様相的身分）が異なるだけだ（たとえばRの解釈のもとでは、起源と意識内容がかりに異なっても、Eと認められる）。Eの現実の指示対象がQ、T、Rで共通である以上、どの解釈で見た場合にEが起こりやすくなるか、という様相的考慮にもとづいた論証Aは有効である。

というのは「実現が高確率である一般的な事実の任意の切片」と見なすことである。「私」の起源、または意識内容を厳密に定めてしまうQやTは、Eを「実現が低確率である特殊な事実」ととどめ置く。「私」の起源も意識内容も厳密に定めはしないRは、Eを「たまたま事後的に同定された一般的な事実の切片」と解釈する。

しかも、Q、T、Rは、物理的事実に関して互いに矛盾した主張をしてはいない。どれを採用しようと、観測事実への合致の度合は等しいのである。いわばQ、T、Rは、互いに概念的な相違のみを持っている。つまり観察によってどれかが反証され他のどれかが確証されるということは決してない。とすると、既成の概念ネットワークとの著しい矛盾をきたすというデメリットがないかぎり（すなわち事前確率に根本的違いがないかぎり）、Eを脱謎化できるかどうかでQ、T、Rの事後確率を評定するのは合理的なのである。

以上の議論は、「私」以外のいかなる指示句についても当てはまってしまうのではと疑う人もいるだろう。しかし、次のような並行的な議論を考えてみよう。

富士山を生んだ特定の時空点で特定の物質が山へと形作られることが、富士山が存在するための必要十分条件である。……Q

富士山のような性質を持つ山をいずれかの時空と物質が生み出すことが、富士山が存在するための必要十分条件である。……T

いかなる性質を持つ山であれ、いずれかの時空と物質が山を生み出すことが、富士山が存在するための必要十分条件である。……R

「富士山」とは何か、というのは、世界に関する経験的事実の一部である。Q、T、Rのどれが尤もらしいかは、富士山を自然物と見なすか、文化的対象と見なすか、美的対象と見なすかによってさまざまだろう。自然物あるいは地理的对象ならばQに言い分があるし、美的対象ならばTに説得力がある。文化的対象ならば、歴史的由来と現象的性質の両者を兼ね備えたNが求められるかもしれない。

富士山を生んだ特定の時空点で特定の物質が富士山のような性質を持つ山へと形作られることが、富士山が存在するための必要十分条件である。……N

しかし、Rが使えるような文脈はない。富士山は、「山である」という以上の内包と機能をはっきりと担う概念だからである。すると、事前確率はRがゼロなので、次の論証もRを確証するには役に立たない。

富士山の形而上学理論N、Q、T、Rの事前確率を、「富士山が現にある」という証拠Eに条件付けた事後確率と比較してみよう。

$$P(E|N) = 0 \quad P(E|Q) = 1 \quad P(E|T) = 1 \quad P(E|R) = 1$$
  
ゆえに  $P(R|E) = P(N|E)$ 、 $P(Q|E)$ 、 $P(T|E)$

この論証によってRが全く信じられるようにならないのは、Rがもともとはっきり偽だからである。Rのもとでは、およそ山というものがあざすればEが成り立つこととなるため  $P(E|R) = 1$  は当然として\*4、 $P(R|E) = P(E|R)P(R)/P(E)$

---

\*4 ここでまた疑問を感じる人がいるかもしれない。Rのもとで「富士山がある」確率はほぼ1だとしても、「富士山が日本一高い山としてある」確率は極小ではないのか、そして全体的証拠の原理に従えば、Eは「富士山がある」ではなく「富士山が日本一高い山としてある」として特徴づけられねばならないのではないのか、すると  $P(E|R) = 0$  ではないのか、と。しかし、RのもとではEの特徴づけは、「山である」こと以外は偶然的である。山であること以外のどんな性質を持っても持たなくても、Eが成立したと認められる。よ

において  $P(R)$  がゼロなので、 $R$  の事後確率は依然としてゼロにとどまるのだ。

このように、論証  $A$  は、どんな概念についても成り立ってしまうトリビアルな論証ではない。「私」については成り立ちそうであっても、富士山や東京タワー、このテーブル等については成り立たないような論証なのである。しかも条件付き確率の重要性がこの上なく際立つ事例でもある。なぜなら、 $Q$ 、 $T$ 、 $R$  の事前確率が経験的に比較不能だったからこそベイズ的に同等と見なし、非経験的な主観的事実に条件付けられた事後確率の差異がそのまま承認されざるをえなくなるからである。論証  $A$  は、 $E$  という条件によってはっきりと事後確率の差異を評定できる、れっきとした実質的論証なのだ。

### 第3節 確率と 輪廻転生

論証  $A$  によって対立仮説よりも高い事後確率を付与された  $R$  は、それでは正確には何を意味しているのだろうか。

$R$  　いかなる内容を持つ意識であれ、いずれかの時空と物質が意識を生み出すことが、「私」が存在するための必要十分条件である。

.....この  $R$  は、いろいろな仕方で自然に強めることができる。 $R$  は、単独で  $R$  を含意しながら互いに矛盾する諸命題の選言として解釈できるからである。たとえば、複数の知的存在が生まれているという現実に合わせて考えると、次のような選言肢が並び立つことになろう（今のこの私は、どの選言肢の中にも当然含まれているものとするが、簡明な表現を期して省略する）。

$R_1$  　すべての意識主体が「私」である。

$R_2$  　今のこの私と時間的に重ならないすべての意識主体が「私」である。

$R_3$  　時間的に重ならない意識主体の極大集合のうち、すべてではない複数の極大集合のメンバーが「私」である。

$R_4$  　時間的に重ならない意識主体の極大集合のうち、特定唯一の極大集合のメンバーが「私」である。

$R_5$  　時間的に重ならない意識主体の極大でない集合のうち、複数の集合のメンバーが「私」である。

$R_6$  　時間的に重ならない意識主体の極大でない集合のうち、特定唯一の集合のメンバーが「私」である。

もしも、宇宙最初の意識主体というものがあるならば（ない可能性については後述）、 $R_1 \sim 6$  のどれもが、宇宙最初の意識主体を含んでいなければならない。なぜなら、非決定論をふたたび前提するならば（あるいは非決定論の可能性が認められるだけでも）、最初の意識主体が生まれた直後に宇宙が消滅するかもしれなかったのであり、その場合、最初の意識主体が私でないとする、 $R$  に反するからである\*5。こうして、 $R$  の内容を最も強

---

って、全体的証拠の原理のナイーブな適用は間違いである。同様のことは、「私」の存在についても言える。 $R$  のもとでは、私が意識的存在であるということ以外のこまごまとした特徴の一切は、 $E$  成立の認定に関与しない。

\*5 正確には、これが言えるためには、 $R$  を様相的な必然命題として理解する必要がある。つまり、「いかなる性質を持つ知性であれ、いずれかの時空と物質が知性を生み出すことが、知性体「私」が存在することと必然的に同値である」と。しかし、 $R$  が経験科学の命題で

く限定するならば、R 6 の特殊形である次の命題が得られる。

R 6 最初の意識主体と、今のこの私との二つだけが、「私」である\*6。

ただし、R 6 と R 2 は、「今のこの私」を固有名として扱った指示を含んでいるようにみえるが、だとするとアドホックな仮説であり、「あらかじめ定められてもいない特定の意識主体をなぜ特権的に扱うか」という答えがたい説明責任を負うことになる。これは Q と T への逆行であり、あくまで「今のこの私」は事後的にたまたま定まった記述として扱うのでないと、真である事前確率がきわめて低いと言わざるをえない。よって、この二つにおける「今のこの私」は、結果として定まった一個の主体を事後的偶然的に指す記述と考えねばならない。

いずれにしても、候補のうちどれが一番尤もらしいか、ということは、ベイズ的に確率の評価ができるはずである。

最初の意識主体が死ぬ（より正確には、知性、意識もしくは自己認知能力を失う）以前に、第二の意識が生じたとしよう。二つ以上の知的内省が同時に併存している最初の特定の時期があったと仮定するわけだ。そうして始めから知的個体が時間的に重なっており、しかも「私」は最初に生じた個体であったとすると、2 番目に生じたのは誰だという問題が生ずる。最初の知的個体が自らを称する「私」については、R が成り立つ。しかし、それ以外の「私」的な主体については、R が成り立たない。その場合、なぜこの私はよりによって R が当てはまる「私」であることがわかるのか、という謎が生じてしまうだろう。つまり、もともと「私は今ここにいる」ということによって R が確認されたと言えたはずなのだから  $P(E | R) = 1$  でなければならず、R は自ずと、「私」が「最初の知的個体」と必ずしも同定できない主体だという可能性を排除する（あるいは低確率とする）内容を持っていなければならない（条件 1 と呼ぼう）。条件 1 を満たす候補としては次のものが残る。

R 1 すべての意識主体が「私」である。

R 2 今のこの私と時間的に重ならないすべての意識主体が「私」である。

R 3 時間的に重ならない意識主体の極大集合のうち、すべてではない複数の極大集合のメンバーが「私」である。

R 4 時間的に重ならない意識主体の極大集合のうち、特定唯一の極大集合のメンバーが「私」である。

R 6 最初の意識主体と、今のこの私との二つだけが、「私」である。

他方、最初の意識主体というものが同定できないとしよう。これは、生物進化論に含意

---

はなく哲学的（概念的）命題であるならば、必然性は暗に想定されている。確率的な修正バージョンと解した場合も（注 1 参照）「必然的な確率」を述べていることに変わりなく、R の事後確率の計算が複雑になるだけで、議論に基本的な変更は生じない。

\*6 渡辺,1996 の用語では R 1 は「遍在転生観」、R 4 と R 6 は「独我転生観」と呼ばれ、R 2 ~ 6 は「穴だらけ遍在転生観」と総称されている。R 6 も穴だらけ遍在転生観である。「今のこの私だけが「私」である」とする考えを渡辺は「純粹独我論」と呼ぶが、純粹独我論は [ R + 非決定論 ] とは相容れない。あるいは、[ R + 非決定論 + 純粹独我論 ] は、通常の意味での独我論の特殊形「今のこの私が最初の知的個体である」を含意する。なお、渡辺,2002 には、主体の単位として瞬間的な意識を想定する「刹那転生輪廻」も加わるが

Bostrom, 2002 が「SSSA（強い自己サンプリング仮説）」と呼ぶものに近い、本稿でも「意識主体」等の語で暗黙に、常識的な人格よりも細かい、統覚による有意義な最小単位を考えている。

されている事態だと思われる。ちょうど、最小の正の実数が存在しないように、最初の意識主体・知的個体なるものはなく、意識のタネがぼんやりと漸進的に増大し、いつのまにか知的主体の系列が続いてきていて、今のこの私はそのうちの一つの極大の系列の中に位置しているにすぎない、というイメージである\*7。

この場合は、条件1を満たすからといって、「時間的に共存する複数の意識主体が同じ主体である」という含意を持つものは、その含意の非常識性ゆえに、つまり「私」の指示対象にふさわしい条件ではないものとして、否定されるだろう。「時間的に共存する複数の意識主体が同じ主体」という含意を排除するという条件を、条件2と呼ぼう。条件2を満たす候補として次のものが残る。

R4 時間的に重ならない意識主体の極大集合のうち、特定唯一の極大集合のメンバーが「私」である。

R6 時間的に重ならない意識主体の極大でない集合のうち、特定唯一の集合のメンバーが「私」である。

ただし、R6の特殊例とされたR6は、条件2を満たしてはいるが、「最初の意識主体はない」という当面の仮定に反しているので、除外されねばならない。

条件1と2をとともに満たすのはR4であることがわかる。相互排他的なRの下位区分の中でR4が最も事前確率が高く、EのもとでRが確証されるということであれば、EのもとでR4が確証されたと言えるだろう。

Q、T、Rが、物理的事実に関して同等であり、観測事実への合致度が等しく、概念的な世界観のみ異にしていたのと同様に、R1～R6は経験的事実への合致度が等しく、「今のこの私」の内的データについて同等であり、「私」の概念的な捉えかたについてのみ相違している。そして、Q、T、Rのうち、Eを条件とする条件付き確率で比較することで、Rが確証された。そのRのうち、概念地図による事前確率で判定すると、R4が最も「私」概念の諸相と整合的である。こうして、R4が最も合理的な「私」概念であることになるだろう。何らかの意識主体のいる時間には必ずただ一人の「私」がいるという、オーソドックスな輪廻転生説である。

#### 第4節 確率的推論と哲学的真理

このようにして、確率的判断によって輪廻転生が論証されたわけだが、このことの教訓は次の二つである。

概念的な相違のみを持つ、経験的に同値な諸命題の信頼度の比較に、ベイズ的推論が使えること。

---

\*7 意識はあるかないかどちらかでしかない、とHumphrey,1986は断定している。ただし根拠は不明である。意識は、電荷や質量の有無のような性質ではなく、赤さとか痛さのような境界の曖昧な性質だと考えるべき理由のほうが思いつきやすい。たとえば、クオリアが意識の本質だとすると、意識は、赤さや痛さと同じ論理に服すると考えられる。ただしその場合、意識主体の「集合」という概念に意味があるかどうか、という問題が生じる。意識史の時間的初期には意識は自然種なので境界は曖昧だが、文明が確立した頃には名目種として扱える、という方向で解決できるかもしれない。いずれにせよ、最初の知性的個体が同定できてできなくてもR4が最も合理的である、というこの後の暫定的結論には影響しない。



異なる諸々の「私」概念は、これまでの経験的データには同等に合致するにせよ、確率的相違を持つからには、これからの経験的データに相違をもたらしかねないこと。

についてはここまでで十分述べたので、 から蓋然的に帰結するように思われる について最後に考えておこう。

「私」とは何であるかとは、各人から見て一人称的主体がどのような外延を持つか、という展望に関わる問題である。

経験的相違がなく概念的相違のみを持つ命題というのは、その記述的内容については同値だが、因果的效果については同等でない可能性が高い。概念は、それを抱く心に影響をもたらすからである。たとえば、コントラストがはっきりわかる3つの仮説R 1、R 4、R 6 をそれぞれ信じる者にとって、生き方がどうあるべきか、世界にどう対処を迫られるかという心構えに違いをもたらされることを確認しよう。

R 1 すべての意識主体が「私」である。

R 4 時間的に重ならない意識主体の極大集合のうち、特定唯一の極大集合のメンバーが「私」である。

R 6 最初の意識主体と、今のこの私との二つだけが、「私」である。

R 1が、すべての人の苦痛も幸福も我が事として感じ取るような利他主義や博愛主義に結びつき、R 6 が利己主義に結びつきやすいことは容易に見てとれるだろう。R 4は、同時代の他者たちに対しては利己的に振る舞い、未来世代の人々に対する配慮を重んじるような態度を育むだろう\*8。なぜなら、子孫の中に常に「私」が必ずいるので、たとえば今浪費政策をとって地球を汚染すると、今の自分はそれで快適な人生を送れるかもしれないが、後に生まれ変わったときに苦難を被ることになってしまうからである。ちょうど、将来の自分のために貯蓄をするのと同じように、未来に転生する自分たちの永き幸福を期待できる政策が選ばれることになるだろう。政治レベルで実際に、現存する人々が一人も生き残っていないような未来にまで続く長期計画を講ずることがあるが、これは暗黙にR 4に支えられた態度であるとも考えられる。

R 1では、同時代に生きる者どうし同じ「私」となるので、個体間の利害調整がさらに直接的となる。全「私」の最大の利益を目指す、というのが自然だとすれば、R 4に通時的な形でのみ立ち現われていた功利主義が、R 1では共時的にも擁護されることになるだろう。

命題と態度との相関は論理的含意や同値のような関係ではない。が、「主体は「私」として認知する個体の利害を優先する」という補助前提Kを加えれば、各態度は各命題と論理的に結びつくことになるだろう\*9。

さらに論理的結びつきが直接的である例として、近い未来に実現するかもしれない「脳分離」「脳結合」の移植手術を考えよう。目的は何でもよい、脳と脳以外の肉体の生き残れる数が不一致であるような緊急事態に際しての措置だとも考えておこう。一つの肉体

---

\*8 ここで利己主義、利他主義というのは、「私」と「他者」の間のそれではなく、「今のこの私」である人物（物理的心身）と他の人物（物理的心身）との間のそれとして理解しなければならない。前者の理解だと、他者の存在を認めないR 1では利他主義が成り立たなくなり、本文に述べた直観的日常的な理解とは逆になってしまうからである。

\*9 補助前提Kを前提に加えても、仮説から行動への推論は妥当ではあるが健全ではないことに注意。補助前提Kそのものが確率的真理なので、結論として得られる行動も確率的真理でしかないからである。なお、R 1とR 4では、いかなる政策をとっていかなる未来が現出しようが、「同一の私（たち）」が生まれてくることになるので、Parfit,1986,ch.16の提起する「非同値性問題」が生じないことに注意。

から救い出した脳を半球で分離して二つの肉体に分けて移植するという手術 タイプ、一つの頭蓋骨に二つの脳を入れて記憶を融合させる手術 タイプ。これらが行なわれたとき、手術前の「私」はどこへ行くのだろうか。主体の分離融合を伴うこのような状況は、人間ファックスでコピー人間を作れるようになったときや、コンピュータソフトで意識主体を作り出せるようになったときには、さらに頻繁に生ずるものと思われる。

R 1では、問題は生じない。どのみち、どの肉体に宿りどのような記憶を持とうが、すべてが等しく「私」であることに変わりない。「私」がどこへ行ったかという問いは生じず、単に一個の私の意識構造内部のパーティションが変更されただけである。

R 6 では、解決法が最も多岐にわたるだろう。現在の哲学界でどのような主体同定が提案されているかについては、ここでは復習するのはやめよう。いずれにせよ主流の考えは、意識を司る脳の分離や融合がなされた瞬間、もとの主体と同一である人物はいなくなる、というものである。分離の場合は1人は消滅して新しい2人が発生し、融合の場合は2人が消滅して新しい1人がそこで発生する。ただしこれは、「私」という主体についても当てはまるかどうかは疑問である。記憶が連続していながら、今までの「私」とは違う「私」がここにいる、というのはいかにも「私」の文法に反しているように思われる。自意識が連続しているのならば、同じ「私」が保たれていると当人自身が感ずるのではないだろうか。

R 4では、解決は比較的わかりやすい。R 1の場合ほど単純明快ではないが、R 6 の場合よりははるかに同意が集まるだろう。同意を集める特定の解決は、R 1とほぼ同じとなる。つまり、手術の前後で「私」は連続して存在し続ける。ただしR 1の時と違うのは次の点だ。

分離の場合..... 分離前は「私」ひとりだった状態から、分離後は「私」&別人へ。  
融合の場合..... 融合前は「私」&別人だった状態から、融合後は「私」ひとりへ。

「私」がどのルートをとって諸世代を生きてゆくかは、全くの偶然である。ちょうど、量子論の多世界解釈で、どの世界が「この現実」として実現するかは全くの偶然であるのと同じである。同時代には、ただ一人の「私」しかいない。同様に、この心身が滅びた後も、どの人物かはあらかじめ特定できないにせよ、必ずただ一人の「私」が持続してゆく。

R 1、R 4、R 6 のどれが一番生き方の指針として合理的であるかは、自ずと明らかであるように思われる。ある程度の利己主義とある程度の利他主義が共存しなければ正常な生活が成り立たないという中庸の徳に鑑みれば、R 4が最も妥当な仮説であることがわかるだろう。むろん、こうした「生き方への影響」によって、記述的には同値で概念的にしか区別できない諸仮説の間で信頼性の評価ができるかどうかというのは単純な問題ではない。ただ言えることはこうである。「同じ世界記述の中でいかなる外延を「私」に付与するか、そしてその結果として個々人がどう振る舞うようになるか」という問題は、「私」という概念の機能の仕方としても最も合理的なのはどの概念か、という問題と無縁ではなく、合理性と真理は無関係ではなく、よって、R 1～R 6 の真偽を、その「心構えへの影響」「倫理的帰結」によって評価することはできそうだと、ということである。

そしてここでも、ベイズの推論が働くことに注意しなければならない。R 1～R 6 それぞれが信奉者の行動に影響する仕方は、文脈によって異なるが、総じて確率的な影響にとどまるからである（注9参照）。R 6 を信じながら慈悲深く自己犠牲的な人、R 1を信じながら冷酷な人はいてもおかしくない（前者も後者もそれぞれの形態のマゾヒストかもしれない）。したがって、Q、T、Rの比較をした論証Aと同様、ここでも帰結の望ましさによる確率的推論がR 1～R 6 の評価に効いてくる。すなわち、R 1～R 6 の事後確率が評価できるようになるだろう。概念分析による事前確率の評価はすでに行なったが、さまざまな利他主義や利己主義の合理性によって、事後確率へと各仮説の信頼度を修正しうるのである。

以上、確率的推論が、経験的区別を伴わないすなわち概念的区別ができるだけの諸命題の間の仮説検定に使えるのだ、という一例を示した。これは、言ってみれば、次のテーゼでまとめることができよう。

「確率的推論は、経験科学だけでなく、哲学においても、仮説検定に有効である」

「条件付き確率が高い」ことをもとに哲学的テーゼが論証できると称する論説は、きわめて稀のようだ。私たちの今いる相対的位置の確率に立脚した Gott,1993, Leslie,1996 のような終末論法や、可能世界の実現確率をあからさまに論じた van Inwagen, 1996 などにしても、経験的に区別できる対立仮説を論じているにすぎない\*10。しかし、彼らがやっているように必然的論証をはみ出した確率的な論証を哲学はもっと利用できるはずであると同様、さらに本稿が試みたように、経験的物理的命題だけでなく概念的命題の真偽評価にも確率は大きい利用されるべきだと思われる。そして、「この自意識の履歴」がどの範囲まで及ぶのかという問題は、世界の物理的経験的な差異を反映しないとはいえ、個々の主観にとって最も身近なデータとしてこの上なく有意義な問題だ。一組の概念的命題の対立仮説を前にして、一方に比べて他方こそが概念的謎を確率的に解消するとわかっていながら、「いくつかの謎や驚きはけっして消去されないのであり、そこから何かを読み取ろうとしてはならないのである」（柏端,2005,p.45）と達観して済ませる態度は、無用の敗北主義であり、哲学の放棄につながるのである\*11。

本稿ではテーゼのデモンストレーションに「私」の論理を事例として用いたため、一種の輪廻転生説（渡辺,1996の言う「独我転生観」。注6参照）を推挙するという副産物をも提供した\*12。倫理や人物同定の哲学によってどれほどこの結論を確証または反証できるかは、これも一種のベイズ的推論によらねばならないことだろう。

第5節 ゾンビ が心の哲学を不安に陥れるのに、 霊体 はそうでもないのはなぜだろうか？

---

\*10 van Inwagen, 1996 のテーマは「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか」であり、本稿のテーマ「なぜ私はいないのではなく、いるのか」と形式的に類似している。しかし、「何かがある」「何もない」という対立仮説は、世界の物理的経験的な、つまり実質的な違いによってのみ対立している。他方、「意識主体はたくさんおり、私もその一員である」「意識主体はたくさんいるが、そのうち誰も私ではない」という対立仮説は、世界の物理的経験的な違いが何ひとつもなくとも対立しうる、概念的な対立仮説である。

\*11 経験的区別のできる対立仮説と、経験的区別が無意味である概念的仮説との中間に、さまざまなレベルの命題がある。たとえば、「因果法則は実在する」vs「ヒュームのな連接があるだけ」、「エメラルドはグリーンである」vs「エメラルドはブルーである」、「+はプラスである」vs「+はクワスである」等々さまざまな対立仮説、すなわち「述語の投射可能性」にのみかかわる概念的な対立仮説についても、必然的な理由付けを得ようとするとならざるが、確率的な仮説検定によれば一方を簡単に却下できるだろう。第5節を参照。もとより、確率的仮説検定は必然的理由付けの完璧な代用になりはしないことは弁えねばならない。

\*12 渡辺自身は、遍在転生観（R1）を推奨している。しかしその根拠は美的判断に基づいており、倫理的判断でも論理的判断でもない。渡辺が遍在転生観に惹かれるのは、本稿で対象とした「私はなぜいないのではなく、いるのか」ではなく「私はなぜ他の誰でもなく、渡辺恒夫なのか」という「超難問」を対象にしているからだろう。「超難問」が文字通りの問いとしては成り立たないことについては三浦,2002、それが本物の問題と感ぜられる心理的背景については三浦, 2003a, pp.29-31 参照。

本稿で考えてきたQ, T, 各Rのように、対立仮説との間に経験的相違の全くない命題を、「概念的命題」と呼ぼう。決定論、心身二元論、ヒュームの因果説なども概念的命題に近い。

それに対し、独我論や、唯物論、様相実在論のような、対立仮説に対して世界の経験的内実に関する差異を述べていながら、経験的検証が絶対にできない内容を有している命題を、「反経験的命題」と呼ぼう。この節では、反経験的命題の例として、二つの正反対の非唯物論的主張 霊体仮説とゾンビ仮説 を「私の存在」というデータによって仮説検定することを考えておくことにする。

霊体仮説……「私並みの意識が、脳状態に匹敵する物理系のないところにも具体化する」  
ゾンビ仮説……「私並みの脳状態が、意識を伴わずして具体化する」

本論第4節までの趣旨は、「ここに私はいる」のようなアプリアリな事実をデータとした論証Aのようなベイズ的推論が、概念的命題の検証に有効であるということだった。ここでは、反経験的命題の検証にもベイズ的推論が当然ながら有効であることを確認する。(以下は、三浦,2000,pp.197-9 や、三浦,2006,6節~7節のF\*\*, \*\*Fの粗描的議論を詳述したものである。ここではF\*\*, \*\*Fをそれぞれ論証ではなく前提の一セットとして提示する)。

意識と脳との関係を直接に知るためのデータは、自分自身がどうであるかという観察によるしかない。私たちは、自分が「意識を持つ脳である」または「脳に宿る意識である」ことを出発点に、つまり自分自身についての観察データを出発点にしてのみ、意識のない脳は可能か、脳のない意識は可能かという他者の問題へ進むことができる。

- A「私は具体化している」<sup>\*13</sup>
- B「私は脳である」
- C「私は意識である」

とする。A、B、Cは概念的命題であり、特別な前提がないかぎり互いに論理的に独立である。Qのもとでは $P(A) = 0$ 、T, Rのもとでは $P(A) = 0$ であることに注意しよう。AとBの両立の蓋然性は、具体化した脳の存在密度に依存し、AとCの両立の蓋然性は、具体化した意識の存在密度に依存する。

さて、いま、A & B & Cが観察データとして得られた。そのデータをそれぞれ、霊体仮説、ゾンビ仮説(それぞれの否定命題)を仮説検定するのに好都合のように、二つの観察例F\*\*, \*\*Fとして解釈する。

前者では、「私」を「たまたま脳に宿った意識」と解し、「では他の意識も脳に宿るのか?」と問う。後者では、私を「たまたま意識を持った脳」と解し、「では他の脳も意識を宿すか?」と問う。

F\*\* 私を意識であるというのが所与で( $P(C) = 1$ )、それが脳として存在するかどうかが調べられ、「脳として存在した」というデータが得られた(A & B & C)、

---

\*13「具体化している」は、Q、T、Rの言葉での「存在している」と同義と理解していたきたい。「私」を一種の述語もしくは抽象的対象と読めば、A、B、Cが互いに論理的に独立であると認めていただけるだろう(ただし、確率的には互いに独立でないような仮説を考えようというのが本節である)。

という場合。

\*\*F 私が脳であるというのが所与で ( $P(B) = 1$ )、それが意識として存在するかどうか調べられ、「意識として存在した」というデータが得られた ( $A \& B \& C$ )、という場合。

F\*\*のもとで

対立仮説は、

K「脳と意識は独立である」

L「脳は意識の必要条件である」

$$L \text{のもとで} \quad A \& C \quad A \& B \quad P(C \mid B \& A) = 1$$

共通する補助前提として  $P(A) = a \quad P(B) = b \quad P(C) = 1$

$P(A \& B \mid K) = 0$  脳レベルの複雑組織は希少だという観測事実による。

$$P(A \& B \mid L) = P(A) = a$$

$$P(A \mid L) \quad P(A \& B \mid L) \quad P(A \& C \mid L) \\ (L \text{と} A, B, C \text{とは独立})$$

$$P(A \& B \& C \mid K) = 0 \quad P(A \& B \& C \mid L) = a \quad \dots\dots$$

ここから、 $P(L \mid A \& B \& C) / P(K \mid A \& B \& C)$

$$= P(L) / P(K) \times P(A \& B \& C \mid L) / (A \& B \& C \mid K)$$

をあてはめると

$$P(L \mid A \& B \& C) / P(K \mid A \& B \& C) = P(L) / P(K)$$

ただし、 $a = 0$ の場合。(F\*\*であるT、Rではこれが満たされる)

よって、事前確率と事後確率の変化を見ると、データ  $A \& B \& C$  により、KよりもLのほうが格段に信頼度を増した、となる。

~Lは、脳なき意識の存在を主張する「霊体仮説」である。これが上の議論で反証されたことになる。

真空に意識が灯ることもある、といった極端な霊体の存在を主張するのが霊体仮説の一種であるのはもちろんのこと、健康な覚醒した脳のレベルの物理的機能が働いていないところにも意識が出現しうる、とするのが霊体仮説である。後者の弱い意味での霊体仮説すら、真である確率がきわめて低い。そのことが、「私は脳を持つ」という観察データにより確証できたことになる。

\*\*Fのもとで

対立仮説は、

K「脳と意識は独立である」

J「意識は脳の必要条件である」

$$J \text{のもとで} \quad A \& B \quad A \& C \quad P(B \mid C \& A) = 1$$

共通する補助前提として  $P(A) = a \quad P(B) = 1 \quad P(C) = c$

$P(A \& C \mid K) = a \cdot c$  については、意識の存在密度は観測できないため、未知。

$$P(A \& C \mid J) = P(A) = a$$

$$P(A \mid J) \quad P(A \& C \mid J) \quad P(A \& B \mid J) \\ (J \text{と} A, B, C \text{とは独立})$$

$$P(A \& B \& C \mid K) = a \cdot c \quad P(A \& B \& C \mid J) = a \quad \dots\dots$$

ここから、 $P(J \mid A \& B \& C) / P(K \mid A \& B \& C)$

$$= P(J) / P(K) \times P(A \& B \& C \mid J) / (A \& B \& C \mid K)$$

をあてはめると

$$P(J | A \& B \& C) / P(K | A \& B \& C) = 1 / c \times P(J) / P(K)$$

ところで、改めて考えてみると観測選択効果により、 $P(C | A) = 1$

(より正確には、 $P(C | A \& H) = 1$  H この議論は私によりなされている H は全ての前提ゆえ省略可能)

つまり、 $P(A \& C) = P(A) = a$

AとCが独立なら、 $P(A \& C) = P(A)P(C) = ac = a \quad c = 1$

(\*\*FであるQではとりわけこれが満たされる)

よって、事前確率から事後確率への変化はない。データA&B&Cにより、KとJの信頼度の比は変わらない。

~Jは、意識なき脳が存在を主張する「ゾンビ仮説」である。これが上の仮説検定で生き残ったことになる。

脳が物理的機能を果たしていない場合に意識がないことは当然として(これはLで主張されている)、脳が私とそっくりの物理的機能を果たしている脳を持つ人に意識がないことがありうるとするのがゾンビ仮説である。「私は意識を持つ」ことを「観察」したからといって、ゾンビ仮説は、唯物論や他の二元論に比べて、反証されない。せいぜいこのことが、「私は意識を持つ」という観察データ(実はアプリアリな事実)により言えることである。

事前確率としては恣意的な値を付与されうる霊体仮説、ゾンビ仮説のうち、私が脳かつ意識として今存在するというデータ(唯一可能な直接データ)によって、霊体仮説は反駁され、ゾンビ仮説は影響を受けない。これが、とくに経験論的な哲学にとって霊体仮説よりゾンビ仮説が脅威である理由であろう。オカルト信者には霊体仮説のほうがウケるかもしれないが、哲学的に興味深いのは独我論にも通ずるゾンビ仮説のほうであり続けている。それはひとえに、確率的な直観で自動対処できない謎を残しているのが霊体でなくゾンビだからなのである。確率的に低い不合理を俗世のオカルト派は好み、確率的に却下しきれない謎を哲学者は好む、という一例だと言えようか。

私たちが単に自己意識を内省することから 霊体 は否定され ゾンビ は留保されるかたわら、あと一つのオカルトの有力トピックたる 生まれ変わり=輪廻転生 については、転生前後の記憶の連続性を含まないという条件ではっきり肯定すべし、という論拠を見てきたのが本稿であった。

## 参考文献

Bostrom, Nick. 2002 Anthropic Bias: Observation Selection Effects in Science and Philosophy (Routledge)

Gott, Richard, J III. 1993 "Implications of the Copernican principle for our future prospects" Nature, Vol.363

Humphrey, Nicholas. 1986 The Inner Eye (Faber and Faber) ニコラス・ハンフリー 『内なる目 意識の進化論』垂水雄二訳、紀伊国屋書店

柏端達也 2005 「23.2576 インチの魚と微調整された宇宙と永遠の謎について」文科省科研費基盤研究B(1)課題番号13480002 『宇宙論における人間原理に関する自然哲学的研究』(代表:横山輝雄)報告書

Leslie, John. 1996 The End of the World (Routledge) ジョン・レスリー 『世界の終焉』松浦俊輔訳、青土社

三浦俊彦 2000 『論理学入門』NHK出版

2002 「「意識の超難問」の論理分析」『科学哲学』35巻2号

2003a 『論理サバイバル』二見書房

- 2003b 「観測選択効果と多宇宙説 伊藤邦武『偶然の宇宙』について」  
『科学哲学』36巻1号、『ゼロからの論証』（青土社、2006）所収
- 2004 『心理パラドクス』二見書房
- 2006 「自然選択説が選択する、不自然な自然選択」『現代思想』2006年2月号、『ゼロからの論証』（青土社、2006）所収
- Parfit, Derek. 1986 Reasons and Persons (Oxford U.P.) デレク・パーフィット『理由と人格』（勁草書房）
- van Inwagen, Peter. 1996 "Why is there anything at all?" Ontology, Identity, and Modality: Essays on Metaphysics Cambridge U. P. 2001 ピーター・ヴァン・インワーゲン「そもそもなぜ何かがあるのか」『現代形而上学論文集』柏端達也・青山拓央・谷川卓訳、勁草書房
- 渡辺恒夫 1996 『輪廻転生を考える 死生学のあなたへ』講談社
- 2002 『私の死の謎 世界観の心理学で独我を超える』ナカニシヤ出版

.....  
第5節について、江上繁樹氏（富山大学）から有益な示唆を得た。ここに記して感謝したい。対話の経緯は、以下に記録されている。

<http://members.jcom.home.ne.jp/miurat/bbs-2006.htm>

なお、この原稿をもとに、「心の科学の基礎論研究会」（第48回）+「人文死生学研究会」（第4回）合同研究会（2006年4月1日、明治大学駿河台キャンパス）で発表を行なった（「輪廻転生と進化論・人間原理・主観確率論」）。